

Today's Story

1. モール・ガール

CHAPTER - I

2. かくれ花火しかけ花火
3. 今夜あなたは抱いてしまう

CHAPTER - II

4. 口許にラメ
5. いっさいがっさい

CHAPTER - III

6. ゲームのあとで
7. 時間の問題
8. ずっとストライプ

CHAPTER - IV

9. バスルームとボブガール
10. 街角マルガリータ
11. 今夜わたしは泣いてしまう

CHAPTER - V

12. 蝶
13. まやかし横丁

CHAPTER - VI

14. わたしはずるい

Band Member

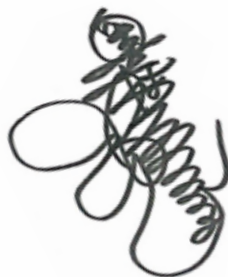
土屋佳代 (Keyboards, Chorus) / 笠間洋平 (Guitar)

田名網大介 (Bass) / 佐藤大輔 (Drums) / 渡邊勇人 (Sax&Flute)

※セットリストは当日変更になる場合がありますのでご了承ください。



「シルエット」を
会場で、配信で、
ご覧いただいたあなたへ



2024年のワンマンライブは
2-11と共に、というおのづから行いましたが
いかがだったでしょうか？
楽しんでくれたなら嬉しいです❀
今夜も、やってみようかなとすぐやってみよ、
という気持ちでいこうと思います。
さて、次はどうなるか……。
また会える日を楽しみにしています！
今日は本当にありがとうございました❀



Official Site & fan club
<https://okumuraaiko.fanpla.jp/>



YouTube CHANNEL
www.youtube.com/@OkumuraAikoOfficial

Instagram
www.instagram.com/okumuraaiko/



公式 X
<https://x.com/okumuraaiko>

[主催] 株式会社サイエンスアート社

[助成] 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【東京ライブ・ステージ応援助成】



奥村愛子



ワンマンライブ 2024 「シルエット」

2024.10.26 (Sat)
OPEN 18:30 / START 19:00

青山 月見ル君想フ

CHAPTER - I

かおり…28歳

私は、飯田橋のとあるビルに入っている飲食店に勤めている。おしゃれとは程遠い定食屋だ。彼は、ランチの常連客だった。客と店員との何気ない会話が半年以上続いた。この人とは気が合うと直感で分かった。話の流れで連絡先を交換できた瞬間の喜びは、忘れられない。たまたに駅前で待ち合わせて飲みに行くようになり、毎日のように連絡を取り合うようになった。はっきりとした確認はしていないけれど、友達に言わせると、交際しているのは明らかだ。彼は部屋へも招待してくれた。生活感のない、けれど片付いているとはとても言えない部屋。オレンジ色の裸電球が、そんな部屋をぼんやりと照らしていた。夏には車で一泊旅行に行った。ドライブのBGMは私の担当。二人が好きなバンドの曲を多めに入れたプレイリストを流しながらの2時間半はあっという間だった。日が暮れると、旅館の売店で線香花火を買い、部屋のバルコニーで火をつけた。花火の匂い、片手にはビール。最高の日とはこういうことか。けれど私は知ってしまった。私が彼の唯一の存在ではないことを。問い詰めたつもりはない。ほんの少し、試してみただけ。聞きたかった言葉が返ってくると、思っていたのに。

CHAPTER - II

ようこ…23歳

私は、去年大学を卒業したばかりの社会人一年目。希望していた広報ではなく営業に配属されてしまい落ち込んでいた春、私の教育係としてペアを組まされた上司が、彼だった。彼はどちらかというとてもぶっきらぼうで、やる気がなさそうに見えるタイプで、最初は苦手だったのだが、天才的な営業スキルの持ち主だった。それを側で学べることは私にとって幸運だったと言える。半年くらいかかって、少しずつ営業の楽しさがわかってきた。何年か後に広報につけることがあったら、必ずこの経験も生きるだろう。彼には感謝しきれない。惹かれるのに時間はかからなかった。退社時間が重なったある日、一杯やってくか、と彼に声をかけられた。遅い時間だったけれど、断る理由はない。高架下の焼鳥屋さんでお互いを労い、仕事以外の彼のくれた一面を覗くことができた。終電が行ってしまったときは、二人して笑ったものだ。そこから、始まった。周りに秘密にしながら二人だけの目配せをし、尊敬する彼の側で働き、毎日夢中で過ごしていた私は、周りが見えなくなっていたのかもしれない。残業後、近くのベンチで乾杯。週に一度、短時間のドライブ。そんな些細なことが楽しかった。奥さんがいることを知ったのは少し経ってからのことだった。部長がその名前を口にしたのだ。元々うちの社員だったらしい。彼は一瞬動揺したように目を泳がせたが、私の方を見て、気にするなというように首を振った。彼の弁明によると、別居中で仲もほとんど冷め切っているという。目を覚ますなら今のうち、と心では思いながらも、ずるずると関係を続けてしまった。そこまでは、まだよかった。しかし、気づいてしまったのだ。もしかして、奥さんの他にも誰かが…？初めて違和感を感じたのは、彼が会議に遅れてきたときだ。勘というの恐ろしいもの。珍しく慌てた顔にきらりと光るラメのかけら。問いかけても上手にはぐらかされる。ゆるしてしまうのは何故だろう。彼の話術はやはり天才的だ。

CHAPTER - III

あおい…35歳

私の結婚は、計画的だった。そのはずだった。大学のサークルで出会い、親友のように心許せる相手に出逢えた。ごく自然に恋愛をし、ごく自然に結婚をした。平凡だけれども幸せな日々を過ごしていた。中学生の頃、人生の計画としてノートに書いた予定そのままをなぞって生きていた。二年前までは。部屋を一つ別で借りてもいいかと打診された頃には、もしかしたら崩れ始めていたのかもしれない。仕事で遅くなることが多く、繁忙期には週の半分が泊まりになってしまうという理由からだった、信じ切っていた私は、その提案を飲み、ほとんど別居という生活が始まってしまった。引き出しを開けたのは、本当に偶然だった。棚の上に置いたマグカップを倒してしまい、引き出しの内側にも紅茶が入り込んでしまったかもしれないと思って拭こうとしただけ。そこで思いもよらないものが目に入った。信じ切っていた私には、頭を殴られたような衝撃だった。私は、信じていた人に裏切られていた。相手の気持ちにずっと気づけなかった。落ち度はこちらにあるのかもしれない。どうにかならないかと足掻いたが、時既に遅し。ずっと続くと思っていたし、友達にも大丈夫に見えていたのに。それから、同じようなことをしてやろうと、自暴自棄になっていたと思う。皆同じように傷付けばいい。そう思った。愛ではないものを分かち合う関係を築いていこう。近づいているようで近づかない、縞模様のような関係。もう誰とも交わらない。

CHAPTER - IV

かおり…28歳

彼に別れを告げた。付き合っていた日々はとても楽しいものだった。旅行にドライブ、思い出もたくさん出来た。おかしいと思ったのは、仕事終わりの彼を見かけてからだ。一緒にいたのは、うちの定食屋にもきたことのある、今年から入ったという部下の女性。何人かで食事に来たランチの時と比べて明らかに距離が近い。近くのベンチで労をねぎらう二人は、とても楽しそうだった。しばらくすると、周りを気にしながら、一緒にタクシーに乗って消えてしまった。その場では、わざと声をかけなかった。遅めのランチに彼が一人で来たとき、店長に言って抜けさせてもらい、急いでいるところを強引に引き留めてみた。会議の前だと言っていた。きっと遅れただろう。アイシャドウの大きめのラメが彼の顔に少しいてしまったけれど、気にしない。周りに気づかれてしまえばいいと思った。あんなものくらいでは気づいてもらえなかっただろうけど。彼の部屋に部下も行っているのだろうか。私のメイク道具はどうしていたのだろうか。ああ、どうにかあちにも私の存在を気づかせたい。そうだ、今度荷物を取りに部屋に行った時に…。少し仕掛けてみようか。勘のいい女であってほしい。

ようこ…23歳

尊敬する上司についていく日々。とても充実していた。オンとオフで違う顔を見られることに喜びを感じてもいた。でも、彼が会議に遅れてきたあの日をきっかけに、夢から覚めた気がする。思えば、他にも気になる点があった。たとえば、彼の車に乗ったとき。Bluetoothの設定ページに

登録されていた、Kという名前。部長が口にしていた彼の奥さんの名前のイニシャルとは違うものだ。考えれば考えるほど、Kが気になる。私の勘が、Kは女だと言っている。それでもまだ希望を持っていた。最近彼が部屋に招いてくれるようになったからだ。汚れた部屋は、彼の会社のデスクをそのまま広げたようだった。しかし、見つけてしまった。彼の部屋のバスルームに、私とは違う色と長さの、長く黒い髪の毛を。彼があまり使わないトリートメントのボトルのところに、二本。まるで見つけてくれと言わんばかりだ。排水溝もチェックした。明らかに誰かの痕跡がある。Kは、私に来ることを、知っていた？これは宣戦布告だろうか。もういい、問い詰めるだけ問い詰めて、私は戦線離脱しよう。彼ならきっと、追ってこない。

CHAPTER - V

あおい…35歳

結婚なんてするんじゃないなかった。本当に大切に思っていたのに。私がただ一人だと思っていたのに。人生の計画はとっくに崩れてしまったし、心を許せる親友も同時に失ってしまった。気を紛らわせてくれるのは仕事だけ。裏切りの先にあるのは絶望だ。かおりという女を知ってしまった。そしてようこという女も知った。でも、もう何も感じない。求められても応えられずに、私だけが乾いていく。随分長い間、自分の顔が自分のものでないような気がしている。仮面をつけているような気分だ。本当の私が何かなんて、私にもわからない。ここはどこだ。一寸先は、地獄なのか極楽浄土か。見知らぬ世界に入り込んで夢を見ているような気分だ。自分で仕掛けた罠にかかっているのは知っている。かかるならとことんかかってやろう。

CHAPTER - VI

あおい…35歳

私は元々綺麗好きな方ではない。散らかっている方が落ち着くのだ。文句を言いながら、それをいつも妻が片付けてくれていた。かおりは昼によく行く定食屋で出会った。音楽の趣味の合う、付き合いやすい女だった。ようこはかわいい部下だ。上司として私を立ててくれる。こちらもいい女の部類に入るだろう。同じようなところに、二人から別れを告げられた。自分以外の女の存在に気づいたからだろうか。聞かれてもうまく逃れたし、鉢合わせたこともなく、スマホやパソコンを見られることもなかったのに。不思議なタイミングだ。それなりに楽しかった。悲しくないわけではない。しかし、本当の心で接していたかと言われると、わからない。二人がいなくなったことに別段衝撃はないのだ。かおりやようこ以外にも、じゅんこやひろみ、他にも数人いるし、また誰かを探せばいい。どんな顔でもいい。私にとっては皆、影のようなものだ。いや、光を遮ったのは私か。だとすれば、ここに見える影は、私自身だ。

かおり、ようこ、あおい
これは、どこにでもいるような 三人の物語。